阿賀浦コミ協だより

平成21年1月28日
広報第5号
阿賀浦コミュニティ協議会

年頭のご挨拶

阿賀浦コミュニティ協議会
会長　藤田　勇

新年あけましておめでとうございます。

新しき年にあたり、皆様方のご多幸をお祈り申し上げます。

旧年中はコミュニティ協議会にご支援ご協力を頂き誠にありがとうございました。

今年も相変わらぬご協力の程よろしくお願いいたします。

顧みますに昨年は米国発信の金融不況が起き世界的にも金融不況をもたらした激動の年でありました。

さて、我がコミュニティ協議会では多種多様の行事及び事業が行われて参りましたが、その中の一つで永い間の地域課題であった防犯対策の一環として、此の度防犯灯設置事業の見通しがついてまいりましたのでご報告いたします。

町内から離れた隣の町内間はあまり対応されていなかったかに思われますが、今回コミュニティ協議会での対応ということで我がコミュニティ協議会地域では以前から阿賀小学校、第五中学校の通学路等がもっとも危険地帯で、特に磐越道新津インター開通以来その周辺では不審者が出没するなどと騒がれてきました。その対策では、地域PTAが当番制で下校時にパトロールをしており、コミュニティの有志でも健康ウォークをされている方々にお願いしております。

さて、その対策として平成19年度に地域全体の通学路等に104灯の設置要望申請を市に提出し、最初新金沢町、東金沢間の市道にブルーの防犯灯8灯を設置し、つぎに昨年東金沢、大安寺間と大安寺新津インター東側に19灯設置し、さらに新津インター西側に14灯設置することについて現在道路公団と協議中で、近々設置の予定であり、これで約40％の整備率になります。後の59％の小中学校周辺と東町、中新田地域につきましては皆様にすでにご案内の近々医療施設の開発が予定されております地域で、それらとの整合性を図って設置される見込みであります。従って、学童の健全育成と地域住民の安全安心の面から、多いに期待したいと考えております。

その他の事業等につきましては、皆様方のご協力のお陰で促進されており、厚くお礼申し上げます。

本年も明るい希望の持てる年でありますようお願い申し上げますとともに、阿賀浦コミュニティ協議会の一層の発展に努めたいと考えておりますので、皆様のご指導の程よろしくお願い致します。

我らの地区の見どころ紹介

皆さんも是非一度お立ち寄りください！

＜中新田＞ 親水広場

提供 中新田 鈴木熊雄さん

おらが村に計画してから、５ヵ年で親水広場が農村公園内に完成しました。

その後、池の周囲に植樹や鯉の放流を行い、環境整備も進み、休日ともなれば、鯉に餌をやったり、子供たちの歓声が聞こえ、現在は集落の「憩いの場」として親しまれております。

＜大安寺＞ 伴百悦の墓

提供 大安寺 昆 和夫さん

伴百悦（1827～1870.7.20）は会津藩士で、戊辰戦争では越後長岡方面で奮戦。鶴ヶ城開城後、2000余にのぼる会津藩士の遺体の埋葬地を罪人塚から長命寺・阿弥陀寺に変更させることに成功し、自らも埋葬作業にあたった。明治２年、会津人に対する圧政のひどかった監察方頭取兼断獄を斬殺し逃亡。大安寺の坂口津右衛門のもとに身を寄せたが、明治３年村松藩の捕吏を板戸越に刺し、自らも自刃。村民により埋葬された。

＜東金沢＞ 七体地蔵尊

提供　東金沢　明間文雄さん

村中の田んぼの端に祭られた地蔵尊は、朝早くからお参りする人をいつも笑顔で迎えてくれます。強い願いと夢を叶える、不思議な御利益は今なお多くの信仰を得ております。辞書で地蔵とは「仏法では人が生きて行く為に繰り返す六つの迷いの世界からの苦しみを取り除いて幸福を与える菩薩」とあります。昨年末、大道庵様の庭にも新しい立派な地蔵尊が建立されましたので、併せて一度お参りにお越しください。

＜新金沢町＞ クリスマスツリー

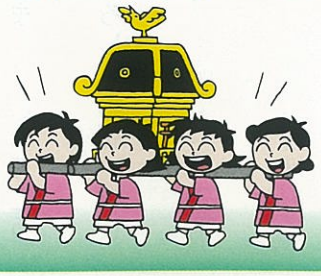
提供　新金沢町　伊藤正和さん

毎年12月中旬から1月上旬位まで、町内行事としてイルミネーションの点灯を行っています。昨年より、通りかかる皆さんの良く見える場所（柄目木橋のたもと）へと設置場所を変更し、皆さんの好評をいただいています。点灯式には多数の子供さん、親御さんの出席を頂き盛大な催しとなっています。

＜東　町＞ 夏祭り

提供　東　町　湯田幸栄さん

宅地造成により、約5倍強の世帯増になった町内。14年前、当時の地域ＰＴＡの皆さんが「交流の場」、子供たちの夏の「思い出づくり」、「ふるさと」を感じてもらいたいという目的で開催したのが始まり。その後、町内会事業に移行し、実行委員会（町内会、有志、地域ＰＴＡなど）を組織し開催。本年度は新しく組織された「青年部」企画の「子供神輿」の巡航もされ、神社のない町内ですが、祭りの認知も進み、子供たちには夏の思い出として楽しんでもらっています。



坂口安吾を偲ぶ（パートⅢ）

― 私の中の「安吾」私観 ―

大安寺 岡 三 郎

戦後「堕落論」「白痴」などの作品で時代の寵児となった坂口安吾は、明治39年10月20日父仁一郎、母アサの５男として新潟市内に生れ、本名炳五という。

父仁一郎は、漢詩人で「北越詩話」を集成する反面、政治家として名を挙げた名士である。そして、坂口一族は豪農で近郷にも名を知られた資産家であった。更には、長兄献吉や次兄上枝という秀才に囲まれた境遇の中で安吾は育っている。こうした環境や、多くの家族との生活が、安吾の中ではいつしか重圧みたいなものとなっていったように私は考える。

伝統に従うことを潔よしとしない、権威にも屈せずして自らの思うが儘に生きたい、こうしたいわゆる反骨的な表面を示すことで、彼はその重圧とたたかい続けたように思う。

反面「人間」の本質的なものへの愛情を傾けていて、「気違いといわれ他人との絶縁状態」にある者こそ偽らない人間性をもつのだと優しく問いかけているのである。

私は、そうした安吾の優しさこそが「ふるさと」を捨てきれず、「アンゴ」と揶揄された自分の名を敢えてペンネームにした反骨、逆に父のふるさとへの思いを込めて「安吾」にしたと思っている。

昭和30年２月17日、桐生市で急逝。いま安吾は、父仁一郎の故郷である大安寺の坂口家墓所に、三千代夫人と共に安らかな眠りについている。

安吾を敬愛して止まない多くの人々は、毎年命日である２月17日に墓前に集まり、地元の人たちが作る甘酒を飲みながら交流を続けている。

編集後記

新年あけましておめでとうございます。

本年もよろしくお願い申しあげます。

「阿賀浦コミ協だより」第五号をお届けします。

阿賀浦コミ協地区各地の見どころを掲載いたしましたので、折がございましたら是非お出かけになって下さい。

総務広報部編集
スタッフ一同